報せ

ぼた雪が廃屋の瓦に沁み溶け
編み込められた生命から
かすかに聞こえる
泥炭の、湿地帯の
遥か北方の孤独の平原を
渡るものもなく
聞こえたように思われたとき
雪は雨に変わり
彼方でひとつの生命が溶け
裸の枝に冷んやりと
滴が映すのは貴方の瞳か
閉ざされた瞼の上に
組み合わされた掌に
再びの雪・・・
赤い血の色が膚に透け
寒々とした鳥のしわがれ声に
淋しい報せを後にして
私は続けなければならなかった
刺胳と放浪とを
私は行かなければならなかった
かすかに明るんだ西の方へ
(1985.1.3)